

等の有害物質が付着したものまでを0レベルから第5レベルとするランク分けを行った。全てのものを再生することは困難だが、汚れが付着した状態でも利用可能などところまでは復旧できる。

報告者：写真、航空写真等は色が流れてしまい全く見えない状況だった。

岩橋幹弘（防衛研究所戦史研究センター史料室）：外部の人が作業を行えた理由として国文研や全史料協の信頼や個人的つながりが挙げた。今後、将来的な被害に備え、どのようなネットワークを作っていったらいいのか。

報告者：私見だが、全史料協の活動を拡大してもらいたい。また、国立公文書館の活動も始まっている。両者が中心となり、様々な自治体と全国的なネットワークを築いてほしい。

木内基容子（八王子総合政策部市史編さん室）：現地の職員は忙殺されて対応できないとの話だった。適宜状況を伝えていていると思うが、作業中に現場の職員は付かなかったのか？また、外部協力者が行うのはどの段階までかの見通しを。

報告者：1点目について。外部の人間のみで作業し、物資が必要な時のみコミットした。2点目について。現状記録をとり目録化しているので、廃棄や保存の提示をしている。また、クリーニングから市のOBにも従事してもらっている。

中野渡一耕（青森県史編さん事務局）：合計で何人ぐらい参加したのか？国文研の方が中心か？山形県の方が参加したとも聞いたがどのように集めたのか？また、全くのボランティアなのか、国文研や被災文化財等救援委員会で支出したのか。真空凍結乾燥をするところもあるが、これは釜石の中のみで作業をしたのか？

報告者：総数はすぐには出ない。中心で活動している埼玉の林貴史さんや福岡の児嶋ひろみさんには長期間滞在してもらい、国文研の教員も交代で現地に行った。全史料協からも2・3泊できてもらった。地元の関係者につ

【質疑記録】

司会（森田貴之）：貴重な体験をお話いただき、写真も多く見せていただいた。写真を見ただけではわからないことやお気持ちなどをご質問いただければと思う。

佐藤誠（（株）三菱総合研究所）：釜石市の文書で泥をかぶって復旧できないものはあるか。津波被害の類型をお教えいただきたい。

報告者：被害状況に一番詳しい青木さんにご意見をいただければ。

青木睦（国文学研究資料館）：第一庁舎の地下と第三・第四庁舎分、現用文書を含む約2万点の乾燥が終了し、クリーニングに移っている。簿冊のものはファイリングされている。水が浸かっているが無傷なものから灯油

いて。山形は私から山形文化遺産防災ネットワークに依頼し、山形県の埋蔵文化財センターの方々が来て下さった。山形ネットを介して岩手県教育委員会の方にも来ていただいた。また、宮城歴史資料保全ネットワークの方が来て下さった。今回、史料ネットの方々によく来ていただいたので作業が円滑に進んだ。費用だが、初発は人間文化研究機構連携研究で支出した。レスキューと同時に災害対策の研究をしようと思ったためである。その後、文化財等レスキューの国文研チームに引き継ぎ、費用支出は別になっている。物品等は費用を使っているが、参加者については基本的には皆さんの善意によって、ボランティアで来ていただいた。乾燥について。真空凍結乾燥は今回は全く考えていない。2万点を行うのは現実問題として不可能なこと、10年廃棄の文書もあるゆえ様子をみるべきと判断した。比較的簡易なかたちでのクリーニングになっている。

小出いずみ（公益財団法人渋沢栄一記念財団）：外部の人がレスキューするにあたり誓約書を書いたと聞いた。それについて聞きたい。

報告者：口外しない、レスキュー目的でのみ文書を見るという誓約書を、作業従事者全員が書いた。

司会：手元の資料が被災をしたら…と考えて質問を出していただきたい。今後は中部と言われている。中部（愛知・岐阜・三重）の方、対策があったらご意見をいただきたい。

報告者：補足として。『日本史研究』590号（2011年10月）に掲載された「『地域に遺された歴史資料』を保存するということ」でもふれたが、三重県生活局が2007年に刊行した『三重県資料現況確認調査報告書』は、三重県史等で所在確認調査を行った地域資料の現状調査についてのものである。同報告書によると18%が散逸ないしは失われている現状がある。三重県が行った作業は非常に意義深い。日常にある代替わりや引っ越し等で文書・資

料が失われているという現状があり、今後も失われる恐れがある。災害だけの問題ではないということをぜひ再認識し、日頃から行政文書・地域資料・民間資料に目配りをしてほしい。

司会：三重県さん、補足をいただければ。

小林秀（三重県史編さんグループ）：所在調査では代替わりも含め、資料が失われるか維持できないとの意見がかなり出てきた。数年後には更に失われるとの危機感がある。今、所在調査だけではなく目録も取れるようにと、各市町の関係者に協力いただきネットワークの形で所在調査を行っている。将来的には100%所在が分かって目録も取れる体制にしていきたい。

報告者：他の自治体も含め、地域資料以外の資料も今後重要になっていく。その地に関係ない資料の所蔵者が来た場合、従来のように古い名主さんや庄屋さんの家を確認するだけではその情報は漏れ落ちる。そういうものを今後、団体等も含めて残していければ。今の話は非常に貴重である。

司会：災害のみならず、記録史料（文書・歴史資料・公文書）が出てくる状況はごく身近にある。それらを併せて対策をとっていくべきという話になったと思う。

佐藤：今回、行政は避難所を作る等、緊急時対応にまず従事したかと思う。そのために被災した資料を参照したいという要望が行政からあったのではないかと。レスキュー時に「これを急ぎで乾かしてほしい」等の要望があったか、対応したかを教えていただきたい。

青木：対応した青木から回答する。実際にある。地下書庫にあったものは半現用・非現用文書が多く、第三・第四庁舎は現用文書である。これらについては乾燥途中から必要な文書を持ち帰られ、頻繁に利用されている。また、都市復興に必要な図面は必要・緊急性があるというお話があり救助した。市職員の関与について。釜石市は分散保管で各課が全ての文書の権限を持っているゆえ、全課の担当

者に集まっていたいただき作業の進捗について全て説明を行った。実際に、あるメーカーから集塵機を借りたりして自らクリーニング作業を行ったりもされている。今後の活動について。全てのクリーニングと共に、5,500レコードのリストを作成・終了している。これらを照合し、実際には市に全対応した文書リストを照合してもらい今後の現場での活用、特に今後の釜石市が分散保管ということもあるので、新庁舎建設にあたる、または今後の文書管理の新たなシステムを構築するという際の基盤になるよう、救済・救助した文書を基に助言を行う等も今後は必要かと考えている。経費について。文化庁文化財等レスキューの中に人間文化研究機構が参画しており、国文研チームは歴博・民博チームと同様にそれぞれの専門分野で活動する立場である。国文研チームは自治体の行政文書を担当し、今後の歴史資料を残そうと活動している。専門スタッフは長期になるので宿泊費等を経費の中で出している。プランニングの際に費用面でも制約もあるゆえ、初めての方への旅費等の支出はなかなか難しかった。よって、一度は経験で来ていただいた。ただし、二度目に来てくださった方については専門スタッフとして国文研チームに加わっていただいた。そのようにそれぞれの方の支援のあり方に即して活動の枠の中で運用したことを付け加える。

司会：もしご意見がないようならばこれで終わりにする。関連報告が明日の全体会で行われる。違った事例があるのでそちらでもご意見よろしくお願いします。

西村先生、ありがとうございました。

報告者：ありがとうございました。